豊 山 学 報 ・ 第 ６ ６ 号
弘法大師御生誕千二百五十年
記 念 特 別 号 抜 刷
令 和 ５ 年 ３ 月 発 行
真言宗豊山派総合研究院

『初会金剛頂経』所説の日輪観

―『悲出現と称する修習念誦儀軌』との比較―

木 村 妙 蓮（美保）

『初会金剛頂経』所説の日輪観
―『悲出現と称する修習念誦儀軌』との比較―

木村妙蓮(美保)

1. 問題の所在

五相成身観は、『初会金剛頂経〔真実摂経〕』に説かれた五段階の真実に至る方法であり、同経の行法の中心となっている。

筆者は、『真言宗豊山派総合研究院紀要』第 27 号[1]において、『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌（以後『理趣会軌』と略す)』の日輪を使用する五相成身観について *Karuṇodaya-nāma-bhāvanā-japa-vidhi*（『悲出現と称する修習念誦儀軌』以後『悲出現』と略す）という蔵訳文献の本文と共に本文を紹介した。

『理趣会軌』『悲出現』ともに五相成身観であることを意識させて、真言はほぼ『初会金剛頂経』と同じものを使用しているが、月輪ではなく日輪を観じている。

筆者は、日輪を観じる五相成身観について、『初会金剛頂経』本文を検討した結果、『初会金剛頂経』の「金剛薩埵成就法（§251〔§は堀内本番号〕)」の部分とその注釈書に見出すことができた。つまり、『理趣会軌』や『悲出現』の日輪を観じる五相成身観は、『初会金剛頂経』「大印智」中の「一切如来薩埵成就法」§251 に説かれたものが儀則となった可能性があると推察するのである。そこで、『初会金剛頂経』本文とその逐語釈である Śākyamitra の *Kosalālaṃkāratattvasaṃgrahaṭīkā*(釈友とする)と Ānandagarbha の *Sarvatathāgata-tattvasaṃgrahamahāyānābhisamaya-nāma-tantravyākhyā-tattvālokakārī-nāma*(慶喜蔵とする)、達意釈である Budddhaguhya の *Tantārthāvatāra*（覚密とする）と覚密の註釈 Padmavajra の Tantrārhāvatāravyākhyāna(蓮金釈)と『悲出現』の本文を比較して検証する。(紙数の関係で、『理趣会軌』についての考察は、別稿としたい)

2.『初会金剛頂経』「金剛薩埵成就法」について

Ⅰ.『初会金剛頂経』本文

「一切如来薩埵成就法」とは五相成身観が説かれた正宗分「第一・第一瑜伽の三摩地[2]」より後で、「第二・最勝曼荼羅王の三摩地」、「第三・最勝羯磨王の三摩地」、「第四・灌頂作法」「第五・悉知を成就する智」、「第六・大三法羯・四種印智」「第七・諸儀則類」と続く中の、「第六・第三法羯・四種印智」の「〔一〕　大印智」に「(1) 一切如来薩埵成就

法・大印智（一切如来現等覚印）」の箇所である。

以下、本文を挙げる。〔H§は、堀内本の番号、不空訳は不空訳『三巻本金剛頂経』、施護訳は施護訳『金剛頂経』、蔵訳はチベット語訳である〕

H.§251　Atha sarvatathāgatasatvasādhanamahāmudrājñānaṃ bhavati.

1)cittajñānāt samārabhya vajrasūryaṃ tu sādhayet /

buddhabimbaṃ tu mātmānaṃ ‘vajradhātuṃ’ pravartayet

2)anayā siddhamātras tu jñānam āyur balaṃ vayaḥ /

prāpnoti sarvagāmitvaṃ buddhatvaṃ api na durlabham iti//

sarvatathāgatābhisaṃbodhimudrā//

そこで、一切如来薩埵成就の大印智になる。

1）心智からはじめて　実に　金剛日を成就するであろう　実に仏の影像を自身となし　金剛界を転ずるであろう

2）これによって悉地のみが、智・寿命・力・若さと一切遍行生を得る。仏性もまた得難きにあらざるなり　と、これが一切如来現等覚智である［遠藤 2013］[3]。

不空訳　次當説一切如来薩埵成就大印智　従心智応発　応観金剛日　観自為仏形　応誦金剛界　由此纔成就　獲智寿力年　得一切遍行　仏体尚不難　此一切如来現証菩提印［大正蔵 No.865, 220a］

施護訳　次宣説一切如来薩埵成就大印智。是即一切如来現証菩提頌曰　先従心智発生已　次応観想金剛月　自身即是諸仏形　復當観想金剛界　由此纔獲成就間　即智寿及力年　一切随意悉能行　乃至仏果不難得［大正蔵 No.882,355c］

蔵訳 དེ་ནས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་སེམས་དཔའ་སྒྲུབ་པའི་ཕྱག་རྒྱ་ཆེན་པོའི་ཡེ་ཤེས་གང་ཡིན་པ་སྟེ། སེམས་རྟོགས་བ་ནས་བརྩམས་ནས་ནི། །རྡོ་རྗེ་དབྱིངས་ཞེས་རྗོད་〔P.བརྗོད་〕བྱེད་ཅིང་། །སངས་རྒྱས་སྐུར་ནི་བདག་བསྒྱུར་ལ། །རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་བསྒོམ་བར་བྱ། །གྲུབ་མ་ཐག་ཏུ་དེ་ཡིས་ནི། །ཡེ་ཤེས་ཚེ་〔P.ཆེ་〕སྟོབས་ན་ཚོད་དང་། །ཀུན་ཏུ་འགྲོ་བ་ཉིད་རྣམས་འཐོབ། །སངས་རྒྱས་འགྲུབ་པ་འང་དཀའ་བ་མིན། །དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་མངོན་པར་རྫོགས་པར་བྱང་ཆུབ་པའི་ཕྱག་རྒྱའོ། ［大谷 No.112, 22b8～23a2, 東北 No.479, 30a3～5］

次に、一切如来薩埵成就大印の智なるものである。

通達心からはじめて「金剛界」と誦すべし。仏のお体によって我は変成し、金剛日を修習するべし。成就するや否や智・寿命・力・若さと遍行性を得る。仏を成就することは難しくない。一切如来現証菩提の印である。［私訳］

［遠藤 2006］にも指摘されているが、梵本は、「vajrasūrya〔金剛日〕」不空訳『金剛頂経』は「金剛日」、蔵訳は「rdo rje nyi ma〔金剛日〕」であるのに対し、施護訳『金剛頂経』は、「次応観想金剛月」とあり「金剛月」である。

上記の梵本、漢訳二本だけでは、五相成身観と日輪の関係を伺い知る事ができないが、蔵訳の「通達心からはじめて『金剛界』と誦すべし（sems rtogs ba nas brtsams nas ni //rdo rje

dbyings shes rjod〔P.brjod〕bye cing)」で、通達菩提心から金剛名灌頂を含めた五相成身観のプロセスであることが想像でき、五相成身観をおこない行者が仏の身（sangs rgyas sku）となり「金剛日〔日輪〕」の修習をすることが推察される。

Ⅱ『初会金剛頂経』註釈書

①『初会金剛頂経』逐語釈（釈友　慶喜蔵）

次に、註釈書の該当部分を引用する。和訳は釈友［遠藤 2015］、慶喜蔵［遠藤 2014］を使用する。

> 釈友その場合、しばらく、一切印の根本になるので大印が説かれるべきである。その故に、それは「一切如来」云々を以て説かれ、一切如来は諸仏菩薩が摂される。〔中略〕その場合、はじめだけ如来の大印成就が説かれ、前述の儀軌により、住する通りに坐して、これら一切は、唯心なりと知るのが、通達心でありこれが、観察心の相である現等覚の第一の真言を説いているのである。
>
> それからはじめて、第五の真言までに一切如来に於て証得し、次に金剛日の羯磨印を結び、頸背部に光輪を思念する。それを詳しくは、一切の暗闇を寂静にする相の日輪を修習して、夜も昼のように、暗闇からも、日輪のように輝くものになることを思念すべきである。その日光の輝きも虚空の限り広がり、自らは仏のお姿をも修習し、金剛界の真言も誦すべきである。これが仏の大印智である。[4]〔後略〕［遠藤 2015, p.247〜248］
>
> 慶喜蔵次に「一切如来の」云々の場合、「次に」という言葉は、その直後である。〔中略〕
>
> 次に、毘盧遮那と不動等の印を如実に結ぶ瑜伽で、Oṃ citta prativedhaṃ karomi という〔通達菩提心の真言〕からはじめて、Yathā sarvatathāgata tathā ahaṃ (仏身円満)と言われるまでによって現等覚し、以上のように現等覚して「Jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ」と誦し、善明な瑜伽で、毘盧遮那等五如来の無辺際の身に入り、自らに加持等をなして「金剛日修習をなす」とは、金剛日光よって譬えられるのが、世尊如来金剛日であり、金剛日の修習をなすべきである。それを説くのが、「仏のお姿に我は変成し」ということである。その義はかく説かれる。金剛日の光明輪により譬えられる仏のお姿に於てといわれる毘盧遮那等の如来身を修習すべきである。以上のように、修習は、自らあるいはまのあたりに作される後有（yaṅ srid-pa）を以て、それより歓喜せんがため、我を変成し、と述べられる。何を誦しつつ修習するのか、となら「金剛界、と誦しつつ」と説かれ、五如来の共通の心真言「Vajradhātu」と誦しながら完全に誦す如きである。[5]［遠藤 2014, p.267〜268］

まず、釈友 慶喜蔵ともに、「一切如来薩埵成就法」で行われていることが五相成身観であることを意識している。

釈友は、「現等覚の第一の真言（mngon par byang chub pa'i sngags dang po）」「第五の真

言まで（sngags lnga pa'i bar gyis)」「金剛界の真言も誦すべきである〔金剛名灌頂〕（rdo rje dbyings kyi sngags kyang brjod par bya ste)」、慶喜蔵は「Oṃ citta prativedhaṃ karoṃi という〔通達菩提心の真言〕からはじめて、Yathā sarvatathāgata tathā ahaṃ〔仏身円満〕と言われるまでによって現等覚し」という真言部分と「現等覚（mngom par rdzogs par sangs rgyas)」という語からである。

次に「金剛日」について、釈友は、「頸背部に光輪を思念する 」「夜も昼のように、暗闇からも、日輪のように輝く」「その日光の輝きも虚空の限り広がり、自らは仏のお姿をも修習し」と瞑想内容を具体的に示すものの、慶喜蔵は、「金剛日光よって譬えられるのが、世尊如来金剛日であり」「金剛日の光明輪により譬えられる仏のお姿に於てといわれる毘盧遮那等の如来身を修習すべきである」と、ここでは瞑想内容は具体的に示していない。

少なくとも 釈友の解説から、光輪を背中に思念し、日輪の輝く様子を瞑想すると言った日輪を瞑想する方法が五相成身観とともに説かれていることを見て取ることができる。

②『初会金剛頂経』の達意釈（覚密と蓮金釈）

覚密は、正宗分での五相成身観を釈す前に§251 の本文を引用している。覚密の五相成身観は基本的に月輪観を用いているが、五相の五である仏身円満の部分で日輪について触れている。蓮金釈は、文量が多いので、日輪に関しての該当部分のみ挙げる。

和訳は覚密［遠藤 2013］、蓮金釈［北村 2016］を使用する。

> 覚密その後に、自身観察等の定の相の一切如来による現等覚を信解し、如来身を自ら加持するのである。〔それは〕次のとおりである。如来の大三昧耶薩埵成就を説くことから「（§251）心智よりはじめて　自ら仏身に転成して　金剛界を誦しつつ　金剛日を修すべきである」と説かれる[6]［遠藤 2013, p.100］。
>
> > 蓮金釈金剛日を観想すべしと、これのみを仰せられ、三摩耶薩埵として修習する身印円満を観想することと、背後に、後背の光焔に輝く日輪が思念されるまでを、如実に観想できるまで目指すべしということなのである[7]。［北村 2016, p.225］
>
> 覚密次いで、この心真言が誦される。智金剛なる月輪に住する多くの自性光明が拡散と収斂の理趣で、毘盧遮那身あるいは仏世尊釈迦牟尼の身が、日輪をもって世間の無辺會に遍満することを観察する。その場合、心真言は次のとおりである。
>
> 〔仏身円満〕Oṃ yathā sarvatathāgathās tathā'haṃ というこれによっても、智の普光をもって等流となる一切如来の身語心を収斂することに観待されるのである[8]。［遠藤 2013, p.104］
>
> > 蓮金釈身についてまた、いかなるものかといえば、信解通りになる故に、世尊毘盧遮那の身あるいは世尊釈迦牟尼の身の日光輪が世界の後の辺際まで覆う我性になると考察すると仰せられ、その中、〔中略〕釈迦牟尼とは、釈迦族の王子の身

として生を受け、釈迦家たちの容貌を持ち、牟尼としてなさる威光を具えておられるから釈迦牟尼であり、その我性の巧方便としての身を日光輪として転じて、無明なる暗を摧破する義を有しているからそのように説かれる[9]。［北村 2013, p.255～256］

蓮金釈で釈されている「無明なる暗を摧破する義」とは、『初会金剛頂経』§74 の「金剛光菩薩」のウダーナ部分を指している。

H.§74　そのとき、金剛光［明］大菩提薩埵はその金剛日をもって一切如来たちを照耀しつつ、この感嘆の語を唱えた。

2. これこそは、一切諸仏の、無知の黒闇を摧破する［光明］なり。極微塵数の日より一層勝れた光明なり[10]。［高橋 2019, p.142］

覚密と蓮金釈から、『初会金剛頂経』§251 と五相成身観との関連がより明らかとなった。「金剛日」は金剛光菩薩の箇所で説かれた金剛日であり、「毘盧遮那身あるいは仏世尊釈迦牟尼の身が、日輪をもって世間の無辺會に遍満」し、その光明は「無知の黒闇を摧破する」ものである。

3.『悲出現』の五相成身観

次に、『悲出現』の日輪を用いた五相成身観を検証する。

『悲出現』の五相成身観については、既に［木村 2017］［木村 2022］に述べたが、今一度『悲出現』に見られる五相成身観の日輪を観ずる部分をまとめる[11]。

〔諸仏の驚覚場面〕

〔『真実摂経』と同じ場面を再現させて、これから始まる瞑想が五相成身観であることを意識させている[12]。〕

〔五相の一　通達菩提心〕

清浄な日輪の如き滴のみが、無量の悲の輝きの常に連続しつつあるところから、ア字の自性を思う[13]。それ自体〔種字〕を転じて心観察を修習する[14]。千の日〔太陽〕によって増大する光線によって輝く身体を有する[15]。自心を如来部に生じることを観察するのは、遍入することである[16]。oṃ cittaprativedhaṃ karomi という真言で、加持する[17]。

〔五相の二　修菩提心〕

金剛薩埵をはじめとした〔十六大菩薩の〕自性を修習する[18]。a ā i ī u ū ṛ ṝ ḷ ḹ e ai o au aṃ aḥ という十六文字の種字によって心観察する[19]。東をはじめとした八方位それぞれに二文字で二重の鬘をあまねく円の方法によって置いて、次にそれ自体が変成する[20]。「以前説いた日〔太陽〕と似たもの[21]」に「その〔二重の鬘の〕内側に入った金剛薩埵等の姿を生じると観想する[22]」。

彼〔行者〕自体の正面で日に似たものが変成すると観想する。その光に触れることによって自身の姿が金剛薩埵の姿に変成することを観想する[23]。

〔行者の〕前方に位置した日に位置する金剛薩埵を召喚して自分の体に入れて、一体となって縛と自在をなして心に「jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ」といって安置する[24]。また、正面に位置する日〔太陽〕は、その背後に生じて日輪の方角と一つになることを観想するべきである[25]。

心観察の際に a 文字の上部を観て、増大した光輪の形によって金剛薩埵の微細なお体が広大になることを観想すべきである[26]。

〔行者〕自身も又 a 字金剛薩埵の胸に位置する日〔太陽〕と近くに位置すると観想し[27]、タンカの他の部分が前と一緒に同体となった時に、自身の姿が金剛王の姿となることを観想する[28]。〔二重の鬘の〕外側に位置する日〔太陽〕に金剛王を鉤召して、自分の体に入れて縛して自在に為すことによって微細の体が広大になることを観想する[29]。又、〔行者〕自身も ā〔字〕の光輪から他の部分を観想して広大になることを観想するべきである[30]。〔この後、順番に十六大菩薩（金剛拳まで）と十六文字分（aḥ まで）同様に観想する〕金剛拳のおわりに至るまで自身の体を広大にするべきである。また、それによって座と胸と背中に日輪が満ちると観想するべきである[31]。

又、心臓にa字を前述の日輪の上に二つ生じてその二つもまた一つになる[32]。

oṃ bodhicittaṃ utopādayāmiという真言を三度誦して加持する[33]。

〔五相の三　成金剛心〕

胸の日輪の上に a 字が法の形によって貫き、智の鋭い光の集まりが拡散する[34]。

前を行く光の集まりが微塵自体の阿閦の三摩地によって堅固になる[35]。日輪の上に、種字に標づけられた本尊の三昧耶印〔金剛杵〕を観想して oṃ tiṣṭha vajra と三度誦して加持する[36]。

〔五相の四　証金剛身〕

そのもの自体の姿となるため法の形が〔体を〕貫くものである[37]。初日の光を有する a 字で虚空のすべての方向が満たされることを観想する[38]。

大安楽の自性である大毘盧遮那が法の自性として生じることを観想する。この〔毘盧遮那の〕心臓に又 a 字を額と喉も又 ā 字と oṃ〔字〕の形で貫かれるのを観想して oṃ vajrātomako 'ham と三度誦すべし[39]。

〔五相の五　仏身円満〕

行者の頭頂に a 字が法の形〔種字の形の光〕によって刺し貫かれることを観想して、〔行者〕自身の身体の支分と内蔵に光明が増大していくのを観想する[40]。寂静と激情などの種々の観想から、拡散して、再び一つになって集まって大毘盧遮那の身になる[41]。〔行者〕自身の体と意の観察などの功徳を得た時からはじめて、一切有情も又自身の体を生じた時に毘盧遮那の身になることを観想するべし[42]。

jaḥ 字の鉤に鉤召して自身の身体に入って加持して歓喜されるべきであって、jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ　というこの真言と oṃ yathā sarvatathāgatās tathāham という〔真言〕によっ

て加持するべし[43]。

〔加持現証〕「この現等覚も又堅固になせ[44]」というべきである[45]。

〔金剛名灌頂〕「金剛界」「金剛界」という金剛名灌頂によって灌頂されるであろうと観想せよ[46]。

以上が、『悲出現』の日輪を用いた五相成身観部分である。

『悲出現』は、五相成身観で用いられる真言が『初会金剛頂経』と同じである上に、「金剛界」と金剛名灌頂する所も存在するところから、H.§251 に説かれる「心智からはじめて」(蔵訳で「通達心からはじめて『金剛界』と誦す」)、釈友や慶喜蔵とも一致している。

「金剛日」の修習について、『初会金剛頂経』本文では言及がなかったが、
釈友「背後に光輪を思念する」蓮金釈「背後に後背の光焔に輝く日輪が思念されるまで」という箇所に相当する『悲出現』の本文は「座と胸と背中に日輪が満ちる（gdan dang thugs ka dang/ rgyab tu ni ma'i dkyl 'khor yongs su gang bar bsams par bya'o」である。
釈友「日輪のように輝くものになることを思念すべきである」という箇所に相当する『悲出現』の本文は「千の日〔太陽〕によって増大する光線によって輝く身体を有する (nyi ma stong bas lhag pa'i 'od kyis snang ba'i lus can te)」「自分〔行者〕の身体の支分と内蔵に光明が増大していくのを観想する（rang gi lus kyi yan lag dang nying lag rnams 'od zer rnam par 'phro bar bsam mo）」に相当する。
釈友「日光の輝きも虚空の限り広がり」という箇所に相当する『悲出現』の本文は「初日の光を有する a 字で虚空のすべての方向が満たされる（dpral ba'i phyogs su yi ge a nyi ma 'char ka'i 'od dang ldan pas nam mkha'i phyogs thams cad kun du gang bar gyur par kun du bsams la）」に相当する。
釈友「自らは仏のお姿をも修習し」慶喜蔵「毘盧遮那等の如来身を修習すべきである」に相当する『悲出現』の本文は「毘盧遮那の身になることを観察するべし（rnam par snang mdzad kyi skur gyur bar bsam mo）である。

以上のように、比較していくと『悲出現』は、瞑想内容が複雑化しているものの、『初会金剛頂経』§251 の部分を意識したものであることが推察できるのである。

§251 や上記に挙げた註釈書において、断片的に述べられていた日輪の五相成身観を完全な形で表したのが『悲出現』の五相成身観であるともいえる。

4.まとめ

以上、『初会金剛頂経』「大印智」中の「一切如来薩埵成就法」§251 の本文とその註釈書の本文を挙げて検証してきた。

『悲出現』で行われる日輪を用いた五相成身観は、『初会金剛頂経』「大印智」中の「一切如来薩埵成就法」§251 に説かれた「金剛日の修習」を具体的に表した儀則ではないかと

推察するのである。

略号

『悲出現』Ye-śes rdo rje 『悲出現と称する修習念誦儀軌』*Karuṇodaya-nāma-bhāvanā-japa-vidhi* ［大谷 No.3346, 東北 No.2524］

H.　梵本『初会金剛頂経〔真実摂経〕』：*Sarvatathāgata tattvasaṃgraha nāma -mahāyānasūtra*『梵蔵漢対照　初会金剛頂経の研究　梵本校訂篇』(§は通番号）

蔵訳『真実摂経』：དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་བསྡུས་པ་ཞེས་བྱ་བ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདོ་［大谷No.112,東北No.479］

不空訳　不空訳『三巻本金剛頂経』:『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』［大正蔵No.88巻］

施護訳　施護訳『金剛頂経』:『仏説一切如来真実摂大乗現証三昧大教王経』［大正蔵No.882,18巻］

釈友　Śākyamitra　*Kosalālaṃkāratattvasaṃgrahaṭīkā*［大谷No.3326, 東北No.2503］

慶喜蔵 Ānandagarbha　*Sarvatathāgata-tattvasaṃgrahamahāyānābhisamaya-nāma-tantravyākhyā-tattvālokakārī-nāma*［大谷No.3333, 東北No.2510］

覚密 Budddhaguhya 『タントラ義入』*Tantārthāvatāra* ［大谷No.3324, 東北No.2501］

蓮金釈 Padmavajra 『タントラ義入註釈』*Tantrārhāvatāravyākhyāna* ［大谷No.3325, 東北No.2502］

参考文献

遠藤祐純2006　『続金剛頂経入門1　初会金剛頂経　金剛界品』ノンブル社, 2006年9月

遠藤祐純2013　『『タントラ義入』和訳　全―Buddhaguhyaによる金剛頂経要解』ノンブル社, 2013年3月

遠藤祐純2013　『梵蔵対照『金剛頂経』金剛界品　金剛界大曼荼羅〈三巻本相当〉和訳』ノンブル社,2013年11月

遠藤祐純2014　『Ānandagarbha造『Tattvāloka』「金剛界品」金剛界大曼荼羅　和訳』ノンブル社, 2014年10月

遠藤祐純2015　『Śākyamitra造『Kosalālaṅkāra』「金剛界品」金剛界大曼荼羅　和訳』ノンブル社, 2015年7月

北村太道2016　『『金剛頂経』系密教　原典研究叢観4　初会金剛頂経概論『タントラ義入』の研究―ブッダグヒヤ本論・パドマヴァジュラ註釈の全訳と解説―』起心書房, 2016年9月

木村美保2017　「”Karuṇodaya”所説の五相成身観について」『豊山教学大会』45号, 2017年3月

木村妙蓮（美保）2022　「『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌（理趣会軌）』の五相成身観について」『真言宗豊山派総合研究院紀要』第27号, 2022年3月

高橋尚夫2019　「『金剛頂経』和訳（三）」『豊山学報』第62号, 2019年3月

堀内寛仁1983　『梵蔵漢対照　初會金剛頂經の研究　梵本校訂篇（上）―金剛界品・降三世品

—』密教文化研究所, 1983年2月

---

[1]［木村 2022］

[2]『初会金剛頂経』の章立ては、堀内本に従った。

[3] 和訳は［遠藤 2013］p.140 ～141 による。

[4] དེ་ལ་རེ་ཞིག་དང་པོ་ཉིད་དུ་ཕྱག་རྒྱ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་གཞིར་གྱུར་པ་ཡིན་པས་ཕྱག་རྒྱ་ཆེན་པོ་བཤད་པར་བྱ་སྟེ།དེ་བས་ན་དེ་ནི་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཅེས་བྱ་བ་ལ་སོགས་པས་སྟོན་ཏེ།དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ནི་སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་གཟུང་〔P.བཟུང་〕ངོ་།〔中略〕།དེ་ལ་དང་པོར〔P.པོ་〕ཁོ་ན་དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་ཕྱག་རྒྱ་ཆེན་པོ་བསྒྲུབ་པར་བཤད་དེ།ཇི་ལྟར་བཤད་པའི་ཚོགས་གནས་ཇི་ལྟ་བ་བཞིན་དུ་འདུག་ལ།འདི་དག་ཐམས་ཅད་ནི་སེམས་ཙམ་མོ་ཞེས་ཤེས་པ་ནི་སེམས་རྟོགས་པ་སྟེ།འདིས་ནི་སེམས་སོ་སོར་རྟོགས་པའི་མཚན་ཉིད་མངོན་པར་བྱང་ཆུབ་པའི་ཐབས་དང་པོ་སྟོན་པ་ཡིན་ནོ།།དེ་ནས་བརྩམས་ཏེ་ཐབས་ལྔ་པའི་བར་གྱིས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་དུ་བདག་ཉིད་མངོན་པར་རྫོགས་པར་སངས་རྒྱས་པར་བྱས་ལ།དེ་ནས་རྡོ་རྗེ་ཉི་མའི་ལས་ཀྱི་ཕྱག་རྒྱ་བཅིངས་ཏེ།ལྷག་པའི་ཐད་ཀར་འོད་ཀྱི་དཀྱིལ་འཁོར་བསམ་མོ།།དེ་ཡང་མུན་པ་ཐམས་ཅད་ཞི་བར་བྱེད་པའི་མཚམ་ཉིད་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་དུ་〔P.དུ་omit〕བསྒོམ་སྟེ།མཚན་མོ་ཡང་ཉིན་མོ་ཇི་ལྟ་བ་བཞིན།མུན་པ་ལ་ཡང་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་བཞིན་དུ་སྣང་བར་གྱུར་པར་བསམ་པར་བྱའོ།།ཉི་མའི་འོད་ཟེར་གྱི་སྣང་བ་དེ་ཡང་ཇི་སྲིད་ནམ་མཁའི་ཁམས་ཀྱི་བར་དུ་སྤྲོ་བར་བྱ་ཞིང་།བདག་ཉིད་སངས་རྒྱས་ཀྱི་གཟུགས་སུ་ཡང་བསྒོམ་ཞིང་།རྡོ་རྗེ་དབྱིངས་ཀྱི་ཐབས་ཀྱང་བརྗོད་པར་བྱ་སྟེ།འདི་ནི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཕྱག་རྒྱ་ཆེན་པོའི་ཡེ་ཤེས་སོ།［大谷 No.3326,123a7～123 b 7, 東北 No.2503,105a4～105b3］

[5] དེ་ནས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཞེས་བྱ་བ་ལ་སོགས་པ་ལ་དེ་ནས་ཞེས་བྱ་བའི་སྒྲ་ནི་དེ་མ་ཐག་པའོ།〔中略〕དེ་ནས་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་དང་།མི་བསྐྱོད་པ་ལ་སོགས་པའི་ཕྱག་རྒྱ་ཇི་ལྟ་བ་བཞིན་དུ་བཅིང་བའི་སྦྱོར་བས།ཨོཾ་ཙི་ཏྟ་པྲ་ཏི་བེ་དྷཾ་ཀ་རོ་མི་ཞེས་བྱ་བ་ནས་བརྩམས་ཏེ།ཡ་ཐཱ་ས་རྦ་ཏ་ཐཱ་ག་ཏ་ཏ་ཐཱ་ཨ་ཧཾ་ཞེས་བྱ་བའི་བར་གྱིས་མངོན་པར་རྫོགས་པར་སངས་རྒྱས་ལ།དེ་ལྟར་མངོན་པར་རྫོགས་པར་སངས་རྒྱས་ནས།ཛཿཧཱུཾ་བཾ་ཧོཿཞེས་བརྗོད་ལ་ཡིད་ཀྱིས་ལེགས་པའི་སྦྱོར་བས་སྦྱོར་བས་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ལ་སོགས་པ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ལྔ་པོ་མཐའ་ཡས་པ་ལུས་ལ་བཅུག་སྟེ།བདག་ལ་བྱིན་གྱིས་བརླབས་པ་ལ་སོགས་པ་བྱས་ནས།རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་བསྒོམ་པར་བྱ།ཞེས་བྱ་བ་ནི་རྡོ་རྗེ་ཉི་མའི་འོད་ཀྱིས་ཉེ་བར་མཚོན་པ་ནི་བཅོམ་ལྡན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་སྟེ།རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་བསྒོམ་པར་བྱའོ།།དེ་ཉིད་བསྟན་པ་ནི།སངས་རྒྱས་གཟུགས་སུ་བདག་བསྒྱུར་ལ།།ཞེས་བྱ་བ་ཡིན་ནོ།དེའི་དོན་འདི་སྟོན་ཏེ།རྡོ་རྗེ་ཉི་མའི་འོད་ཀྱི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱིས་ཉེ་བར་མཚོན་པའི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་གཟུགས་ཞེས་བྱ་བ་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ལ་སོགས་པའི་དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་སྐུར་བསྒོམ་བར་བྱའོ།།དེ་ལྟར་བསྒོམ་པ་ནི་རང་ཉིད་དམ་མདུན་དུ་བྱ་བ་ཡང་སྲིད་པས།དེ་ལས་དགའ་བར་བྱ་བའི་ཕྱིར་བདག་བསྒྱུར་ལ་ཞེས་བྱ་བ་གསུངས་སོ།།ཅི་ཞིག་བློས་ཤིང་བསྒོམ་པར་བྱ་ཞེན།རྡོ་རྗེ་དབྱིངས་ཞེས་རྗོད་བྱེད་ཅིང་།།ཞེས་བྱ་བ་གསུངས་ཏེ།དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ལྷའི་སྤྱིའི་སྙིང་པོ་བ་ཛྲ་དྷཱ་ཏུ་ཞེས་བྱ་བ་རྗོད་པར་བྱེད་ཅིང་ཡོངས་སུ་བློས་བཞིན་དུའོ།
［大谷 No.3333, 163b4～164a8, 東北 No.2510, 144b～145b5］

[6] དེའི〔P.དེ་〕འོག་ཏུ་རང་གི་སེམས་བརྟག་པ་ལ་སོགས་པ་མཉམ་པར་གཞག་པའི་མཚན་ཉིད་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་མངོན་པར་རྫོགས་པར་བྱང་ཆུབ་པ་མོས་པར་བྱས་ལ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་སྐུར་བདག་ཉིད་བྱིན་གྱིས་བརླབ་པོ།ཇི་སྐད་དུ།དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་མ་ཚིག་ཆེན་པོའི་སེམས་དཔའ་བསྒྲུབ་པ་བསྟན་པ་ལས།སེམས་ཤེས་པ་ལས་བརྩམས་ནས་ནི།།བདག་ཉིད་སངས་རྒྱས་སྐུར་བསྒྱུར་ཏེ།།རྡོ་རྗེ་དབྱིངས་ནི་བློས་བྱེད་ཅིང་།།རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་བསྒོམ་པར་བྱ།།ཞེས་གསུངས་སོ།［大谷 No.3324, 17b6～8, 東北 No.2502, 15b5～6］

[7] རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་བསྒོམ་པར་བྱ།།ཞེས་གསུངས་པ་འདི་ཁོ་ན་སྟེ།དམ་ཚིག་སེམས་དཔར་བསྒོམ་པའི་སྐུ་ཕྱག་རྒྱ་རྫོགས་པར་

བསྒོམ་པ་དང་།རྒྱབ་ཏུ་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་རྒྱབ་རྟེན་འོད་འབར་བ་ཅན་བསམ་པར་བྱ་ཞེས་པའི་བར་དུ་དེ་མཚོན་པར་བྱེད་བའོ།［大谷 No.3325, 180b7～181a1, 東北 No.2502, 168a1～2］

[8] དེ་ནས་སྙིང་པོ་འདི་བརྗོད་དོ།།ཡེ་ཤེས་ཀྱི་〔P. ཀྱི་omit〕རྡོ་རྗེ་ཟླ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར་ལ་གནས་པ་དེ་ཉིད་འོད་ཟེར་མང་པོ་〔P. མང་པོ་omit〕འཕྲོ་བ་དང་འདུ་བའི་ཚུལ་གྱིས་བཅོམ་ལྡན་འདས་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ཀྱི་སྐུ་འཁ།ངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཤཱ་ཀྱ་ཐུབ་པའི་སྐུ་ཉི་མའི་འོད་ཀྱི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱིས་འཇིག་རྟེན་གྱི་〔P.གྱིས་〕ཁམས་མཐའ་ཡས་པར་〔P. པས་〕ཁྱབ་པར་བདག་ཉིད་གྱུར་པར་རབ་ཏུ་བརྟག་གོ།དེ་ལ་སྙིང་པོ་ནི་འདིའོ།།ཨོཾ་ཡ་ཐཱ་ས་ཪྦ་ཏ་ཐཱ་ག་ཏ་སྟ་ཐཱ་ཨ་ཧཾ་〔D. ཨོཾ་ས་ཪྦ་ཏ་ཐཱ་ག་ཏ་སྟ་ཐཱ་ཨ་ཧཾ།〕ཞེས་བྱ་བ་འདིས་ཀྱང་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་〔P.ཀྱིས་〕ཀུན་དུ་འོད་ཀྱིས་〔P.ཀྱི་〕རྒྱུ་མཐུན་པར་གྱུར་པ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་〔P. ཐམས་ཅད་omit〕ཀྱི་སྐུ་དང་གསུང་དང་ཐུགས་རྣམས་བསྡུས་པར་ལྟའོ།［大谷 No.3324, 20a1～3, 東北 No.2502, 17b6～18a2］

[9] སྐུ་ཡང་ཇི་ཙ་བུ་ཞིག་ཅེ་ན།གང་ལྟར་མོས་པ་དེ་བཞིན་དུ་གྱུར་པའི་ཕྱིར་བཅོམ་ལྡམ་འདས་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ཀྱི་སྐུ་འཁ།བཅོམ་ལྡན་འདས་ཤཱ་ཀྱ་ཐུབ་བའི་སྐུ་ཉི་མའི་འོད་ཀྱི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱིས་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཁམས་མཐའ་ཡས་བར་ཁྱབ་པའི་བདག་ཉིད་དུ་གྱུར་པར་རབ་ཏུ་བརྟག་གོ་ཞེས་གསུངས་ཏེ།〔中略〕ཤཱ་ཀྱ་ཐུབ་པ་ཞེས་པ་ནི།ཤཱ་ཀྱའི་རིགས་རྒྱལ་པོའི་སྲས་སུ་སྐུ་སྐྱེ་བ་བཞེས་ཤིང་ཤཱ་ཀྱ་རྣམས་ཀྱི་ཁ་ཐུབ་པར་མཛད་པའི་གཟི་མདངས་མངའ་བས་ན།ཤཱ་ཀྱ་ཐུབ་པ་སྟེ།དེའི་སྐུ་ཐབས་ཀྱི་བདག་ཉིད་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱིས་བསྐོར་བ་སྟེ།མ་རིག་པའི་མུན་པ་འཇོམས་པར་བྱེད་པའི་དོན་དང་ལྡན་པས་ན།འདི་ལྟར་བསྟན་ཏོ།［大谷 No.3325, 191b6～192a3, 東北 No.2502, 178b5～179a2］

[10] atha Vajra-prabho mahā-bodhisatvas tena vajra-sūryeṇa sarva-tathāgatān avabhāsayann idam〔udānam〕udānayām āsa//
"idam tat sarva-buddhānām ajñāna-dhvānta-nāśanam paramāṇu-rajaḥ-saṃkhya-sūryādhikatara-prabham" iti//

[11] 今回、本文を引用するに当たって和訳しなおした箇所もある。

[12] མངོན་པར་བྱང་ཆུབ་པ་རྣམ་པ་ལྔ་རིམ་པ་འདིས་ཡང་དག་པར་བསྐྱེད་པར་བྱའོ།［大谷 No.3346, 163 b 6, 東北 No.2524, 144a5～6］

[13] ཉི་མའི་གཀྱིལ་འཁོར་རྣམ་པར་དག་པ་ལྟེ་བུའི་ཐིག་ལེ་ཙམ་དཔག་ཏུ་མེད་པའི་སྙིང་རྗེའི་སྣང་བའི་རྒྱུད་ཡོད་ཡོངས་སུ་འགྱུར་བཞིན་པ་ལས་ཡི་གེ་ཨའི་ངོ་བོ་ཉིད་དུ་བསམས་ལས་［大谷 No.3346,161b5,東北 No.2524,144a6～7］

[14] དེ་ཉིད་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལ་སེམས་སོ་སོར་རྟོགས་པའི་རྣམ་པར་བསྒོམ་པར་བྱ་སྟེ།［大谷 No.3346,162a1,東北 No.2524,144b2］

[15] ཉི་མ་སྟོང་བས་ལྷག་པའི་འོད་ཀྱིས་སྣང་བའི་ལུས་ཅན་ཏེ་［大谷 No.3346,161b5,東北 No.2524,144b3］

[16] རང་སེམས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་རིགས་སུ་བསྐྱེད་པ་ལ་སོ་སོར་རྟོག་པ་ནི་རབ་ཏུ་ཆུད་ཅིང་འཇུག་པའོ།［大谷 No.3346,161a1～2,東北 No.2524,144b6～7］

[17] དེ་ཉིད་ཀྱིས་འདིར་བྱིན་གྱིས་བརླབ་པར་བྱ་སྟེ།ཨོཾ་ཙི་ཏྟ་པྲ་ཏི་བེ་དྷཾ་ཀ་རོ་མི་ཞེས་བརྗོད་པར་བྱའོ།［大谷 No.3346,162a6,東北 No.2524,144b7］

[18] རྡོ་རྗེ་སེམས་དཔའ་ལ་སོགས་པའི་ངོ་བོ་ཉིད་བསྒོམ་པར་བྱའོ།［大谷 No.3346,162b1,東北 No.2524,145a1］

[19] ཨ་ཨཱ།ཨི་ཨཱི།ཨུ་ཨཱུ།རྀ་ཪཱྀ་ལྀ་ལཱྀ།ཨེ་ཨཻ།ཨོ་ཨཽ།ཨཾ་ཨཿཞེས་བྱ་བའི་ཡི་གེ་བཅུ་དྲུག་པོའི་ས་བོན་གྱི་ཡི་གེ་རྣམས་ཀྱིས་སེམས་སོ་སོར་རྟོགས་པ་［大谷 No.3346,162b1, 東北 No.2524,145a1～2］

[20] ཤར་ལ་སོགས་པ་ཕྱོགས་བརྒྱད་ཀྱི་ཕྱོགས་རེ་རེ་ཞིང་ཡི་གེ་གཉིས་གཉིས་ཀྱི་ཕྲེང་བ་ཀུན་ནས་ཟླུམ་པའི་ཚུལ་གྱིས་བཞག་ནས་དེ་ནས་དེ་ཉིད་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་［大谷 No.3346,162b2～3, 東北 No.2524,145a2］

[21] ཉི་མོའི་ཆ་ལྟ་བུ་ཐྱ་མ་བཞིན་དུ་［大谷 No.3346,162b3, 東北 No.2524,145a2～3］

[22] དེའི་ནང་དུ་ཆུད་པའི་རྡོ་རྗེ་སེམས་དཔའ་ལ་སོགས་པའི་གཟུགས་སུ་བྱུང་གྱུར་པར་བསམས་ལ། ［大谷 No.3346, 162b3～4, 東北 No.2524, 145a3］

[23] དེ་ཉིད་ཀྱི་ཐད་ཀར་ཉི་མའི་ཆ་ལྔ་བུར་ཡོངས་སུ་གྱུར་བར་རྣམས་པར་བསམས་ཏེ།དེའི་འོད་ཀྱིས་རིག་པ་ཉིད་ཀྱིས་བདག་ཉིད་ཀྱི་གཟུགས་རྡོ་རྗེ་སེམས་དཔའི་གཟུགས་སུ་ཡོངས་སུ་གྱུར་བར་བསམས་ཏེ། ［大谷 No.3346,162b5, 東北 No.2524,145a4～5］

[24] མདུན་ན་གནས་པའི་ཉི་མའི་ཆ་ལ་གནས་པའི་རྡོ་རྗེ་སེམས་དཔའ་བཀུག་ནས་རང་གི་ལུས་ལ་བཙུག་སྟེ།གཅིག་ཏུ་བྱས་ནས་བཅིང་བ་དང་དབང་དུ་བྱས་ཏེ།ཡིད་ཀྱིས་ཛཿཧཱུྃ་བཾ་ཧོཿཞེས་བྱ་བས་གཞག་པར་བྱའོ། ［大谷 No.3346, 162b6, 東北 No.2524,145a5］

[25] མདུན་ན་གནས་པའི་ཉི་མའི་ཆ་ཡང་དེའི་རྒྱབ་ཉིད་དུ་འོངས་ནས་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་གྱུར་པར་བསམ་མོ། ［大谷 No.3346,162b8, 東北 No.2524,145a5～6］

[26] སེམས་སོ་སོར་རྟོགས་པའི་ཆ་ལ་ཡི་གེ་ཨའི་ཆ་སྟེང་དུ་བལྟས་པས་ལྷག་པར་གྱུར་པའི་འོད་ཀྱི་དཀྱིལ་ཁོར་གྱི་གཟུགས་ཀྱིས་རྡོ་རྗེ་སེམས་དཔའི་སྐུ་ཙུང་ཟད་རྒྱས་པར་གྱུར་པར་བསམས་སོ། ［大谷 No.3346,163b8～164a1, 東北 No.2524,145a6～7］

[27] ཡི་གེ་ཨ་སེམས་དཔའི་ཐུགས་ཀར་གནས་པ་ཉི་མའི་ཆ་དང་ཉོ་བར་གནས་པ་ཉིད་དུ་བསམས་ལ་ཡོངས་སུ་གྱུར་པ་ལས་ ［大谷 No.3346,164a1～2, 東北 No.2524,145a7］

[28] ཐང་ཀའི་ཆ་གཞན་སྤྲ་མ་དང་ལྷན་ཅིག་ཐ་མི་དད་པར་གྱུར་པས་དུས་གཅིག་ཏུ་རང་གི་གཟུགས་རྡོ་རྗེ་རྒྱལ་པོའི་གཟུགས་སུ་གྱུར་པར་བསམས་ལ། ［大谷 No.3346,164a2, 東北 No.2524,145a7～145b1］

[29] ཕྱི་རོལ་ན་གནས་པའི་ཉི་མའི་ཆ་ལ་བཞུགས་པའི་རྡོ་རྗེ་རྒྱལ་པོ་བཀུག་ལ་རང་གི་ལུས་ལ་བཙུག་སྟེ།བཅིངས་ནས་དབང་དུ་བྱས་པས་ལུས་ཙུང་ཟད་ཀྱིས་རྒྱས་པས་གྱུར་པར་བསམས་ལ། ［大谷 No.3346,164a2～3, 東北 No.2524,145b1］

[30] བདག་ཉིད་ཀྱང་ཨཱ་ཉིད་ཀྱི་འོད་ཀྱིས་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་ཆ་ལས་ཆ་གཞན་བསམས་ནས་རྒྱས་པར་གྱུར་པར་བསམས་སོ། ［大谷 No.3346,164a3, 東北 No.2524,145b1～2］

[31] རྡོ་རྗེ་ཁྲུ་ཚུར་གྱི་མཐར་ཐུག་པའི་བར་གྱིས་རང་གི་ལུས་རྒྱས་པར་བྱའོ།།དེས་ཀྱང་གདན་དང་།ཐུགས་ཀ་དང་།རྒྱབ་ཏུ་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་ཡོངས་སུ་གང་བར་བསམ་པར་བྱའོ། ［大谷 No.3346,164a7, 東北 No.2524,145b4～5］

[32] ཡང་སྙིང་གར་ཡི་གེ་ཨ་ལ་སྦྱར་བཤད་པའི་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་སྟེང་དུ་གཉིས་པ་བསྐྱེད་ལ་དེ་གཉིས་ཡང་གཅིག་ཏུ་བྱའོ། ［大谷 No.3346,164a8, 東北 No.2524,145b5］

[33] འདི་སྐད་དུ་བོ་དྷི་ཙི་ཏྟཾ་ཨུ་ཏྤཱ་ད་ཡཱ་མི།ཞེས་ལ་ན་གསུམ་བརྗོད་ལ་བྱིན་གྱིས་བརླབ་པར་བྱའོ། ［大谷 No.3346,164b2,東北 No.2524,145b6～7］

[34] སྙིང་གའི་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་སྟེང་དུ་ཡི་གེ་ཨ་ཆོས་ཀྱི་རི་མོས་ཕྱུག་པ་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་འོད་ཟེར་རྣོན་པོའི་ཚོགས་འཕྲོ་བ ［大谷 No.3346,164b2～3, 東北 No.2524,145b7］

[35] སྔོན་དུ་འགྲོ་བའི་སྣང་བའི་ཚོགས་ཀྱི་རྡུལ་ཕྲ་རབ་ཀྱི་ངོ་བོ་མི་གཡོ་བའི་ཏིང་ངེ་འཛིན་གྱི་མཐུས་བརྟན་པར་གྱུར་པ་ནམ་མཁའི་ཁམས་མ་ལུས་པར་ཀུན་དུ་ཁྱབ་པའི་ཚད་དང་ལྡན་པའི་རྡོ་རྗེ་ཆེམ་པོའི་གཟུགས་ས་བོན་གྱི་ཡི་གེས་མཚན་པ་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཁམས་དཔག་ཏུ་མེད་པའི་རྡུལ་ཕྲ་རབ་ཀྱི་གྲངས་དང་མཉམ་པའི་ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་བས་ལྷག་པའི་འོད་དང་ལྡན་པ་ ［大谷 No.3346,164b3～4, 東北 No.2524,145b7～146a1］

[36] ཉི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་གྱི་སྟེང་དུ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དམ་ཚིག་གི་ཕྱག་རྒྱའི་ངོ་བོ་ཉིད་བསམས་ལ།ཨོཾ་ཏི་ཥྛ་བ་ཛྲ་ཞེས་ལན་གསུམ་བརྗོད་ལ་བྱིན་གྱིས་བརླབ་པར་བྱ་ཞིང་། ［大谷 No.3346,164b4, 東北 No.2524,146a2］

[37] དེ་ཉིད་ཀྱི་གཟུགས་བརྟན་དུ་གྱུར་པའི་ཕྱིར་ཆོས་ཀྱི་རི་མོས་ཕྱུག་པ་ ［大谷 No.3346,165b6, 東北 No.2524,146a3］

[38] དཔྲལ་བའི་ཕྱོགས་སུ་ཡི་གེ་ཨ་ཉི་མ་འཆར་ཀའི་འོད་དང་ལྡན་པས་ནམ་མཁའི་ཕྱོགས་ཐམས་ཅད་ཀུན་དུ་གང་བར་གྱུར་པར་ཀུན་དུ་བསམས་ལ། ［大谷 No.3346,165b6～7, 東北 No.2524,146a3～4］

[39] བདེ་བ་ཆེན་པོའི་ངོ་བོ་ཉིད་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ཆེན་པོ་ཆོས་ཀྱི་ཕྱག་རྒྱའི་རང་བཞིན་དུ་ཡང་དག་པར་བྱུང་བར་བསམ་མོ། །འདིའི་ཐུགས་ཀར་ཡང་ཡི་གེ་ཨ་དཔྲལ་བ་དང་། །སྙིག་མོར་ཡང་ཡི་གེ་ཨཱཿདང་ཨོཾ་(D.པོ་)རི་མོས་ཕྱུག་པ་བསམས་ལ། །ཨོཾ་བ་ཛྲ་ཨཱ་ཏྨ་ཀོ་(D.ཀོ་ཧ་)ཧཾ། །ཞེས་ལེན་གསུམ་བརྗོད་པར་བྱའོ། ［大谷 No.3346,165a3～4, 東北 No.2524, 146a7～146b1］

[40] དེ་ཉིད་ཀྱི་སྤྱི་གཙུག་ཏུ་ཡི་གེ་ཨ་ཆོས་ཀྱི་རི་མོ་དེ་ཉིད་ཀྱིས་ཕྱུག་པར་བསམས་ལ། །རང་གི་ལུས་ཀྱི་ཡན་ལག་དང་ཉིང་ལག་རྣམས་ལས་འོད་ཟེར་རྣམ་པར་འཕྲོ་བར་བསམ་མོ། ［大谷 No.3346,165a4～5, 東北 No.2524,146b1］

[41] ཞི་བ་དང་དྲག་པོ་ལ་སོགས་པའི་བསམ་པ་སྣ་ཚོགས་པས་ཕྱེ་བ་རྣམས་ཀྱི་དོན་མཛད་ནས་སླར་ཡང་གཅིག་ཏུ་གྱུར་ཏེ། །འདུས་ནས་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ཆེན་པོའི་ཕྱག་རྒྱ་ཆེན་པོའི་སྐུར་གྱུར་ནས་ ［大谷 No.3346,165a8～165b1, 東北 No.2524,146b4］

[42] རང་གི་ལུས་དང་། །ཡིད་སོ་སོར་རྟོག་པ་ལ་སོགས་པའི་ཡོན་ཏན་ཐོབ་པའི་དུས་ནས་བརྩམས་ཏེ། །སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱང་རང་གི་ལུས་བསྐྱེད་པའི་དུས་སུ་རྣམ་པར་སྣང་མཛད་ཀྱི་སྐུར་གྱུར་བར་བསམ་མོ། ［大谷 No.3346,165b5～6, 東北 No.2524,146b7～147a1］

[43] ཡི་གེ་ཛཿའི་ལྕགས་ཀྱུས་དྲངས་ལ་རང་གི་ལུས་ལ་བཙུག་སྟེ། །བྱིན་གྱིས་བརླབས་ནས་ཡོངས་སུ་མཉེས་པར་བྱ་ཞིང་། །ཛཿཧཱུྃ་བཾ་ཧོཿཞེས་བྱ་བ་འདི་དང་། །ཨོཾ་ཡ་ཐཱ་〔D.ཏཱ་〕ས་རྦ་ཏ་ཐཱ་ག་ཏ་སྟྭཱ་ཐ་ཨ་ཞེས་བྱ་བས་བྱིན་གྱིས་བརླབ་བོ། ［大谷 No.3346, 165b6～7, 東北 No.2524, 147a1～2］

[44] H.§29 abhisaṃbodhiṃ dṛdhīkuruta ce'ti//

[45] མངོན་པར་བྱང་ཆུབ་པ་འདི་ཡང་བརྟན་པར་མཛོད་ཅིག་ཅེས་བྱའོ། ［大谷 No.3346, 165b8, 東北 No.2524, 147a2～3］

[46] རྡོ་རྗེ་དབྱིངས་ཞེས་རྡོ་རྗེ་དབྱིངས་ཤེས་རྡོ་རྗེ་〔D. དབྱིངས་ཤེས་རྡོ་རྗེ་omit.〕མིང་གི་དབང་བསྐུར་བས་དབང་བསྐུར་〔D. བས་དབང་བསྐུར་omit.〕བར་གྱུར་པར་བསམ་མོ། ［大谷 No.3346, 165b8～166a1, 東北 No.2524, 147a3］